日本漢方交流会機関紙「玉函」原稿

大塚敬節先生 70 歳当時の思い出

日本漢方交流会理事長・広島漢方研究会副会長
薬王堂漢方薬局・鍼灸指圧治療院　　吉本　悟

はじめに

平成 28 年 6 月 3 日より 5 日の 3 日間、四国の高松市において第 67 回日本東洋医学会学術総会がサンポートホール高松、かがわ国際会議場、JR ホテルクレメントの三会場で開催されました。私は 4 日の午前中に行われたワークショップ 2 におきまして個人発表をさせていただきました。テーマは「四国の生んだ漢方医家」と題し松岡尚則先生、並木隆雄両先生が座長を務められ、鍋谷欣市先生、松岡尚則先生、並木隆雄先生、秋葉哲生先生、丁宗鐵先生方の発表とともにお話しさせていただきました。近世における四国が生んだ漢方医家では奥田謙蔵先生、大塚敬節先生が有名で奥田先生の高弟であられた藤平健先生や石原明先生、伊藤宏先生、大塚恭男先生などの思い出話も紹介され興味深いワークショップとなりました。
私は昭和 48 年から昭和 51 年にわたり東京都新宿区にあった大塚敬節先生を院長とする修琴堂医院に薬剤師として働いてきました。就職当時、大塚敬節先生は 72 歳、診療にお忙しい毎日でしたが漢方を志す者に対しては医師も薬剤師も区別せず熱心に指導していただいた記憶があります。
玉函ではワークショップでお話しさせていただいた内容に加筆しながら記述したいと思います。先ず、医師の先生方が多い中で薬剤師が認められている漢方の状況説明からお話しさせていただきました。

現在、薬局において薬剤師が扱える漢方製剤は各製薬メーカーが製造する OTC 医薬品があること、それ以外にも薬局製造業の許可を得れば漢方薬を含む医薬品を製造し販売することができます。
日本薬局方で定められた漢方関連の医薬品は 2015 年に 24 処方が加えられ現在 236 処方となっております。
日本薬局方で医薬品の認可を得た生薬(漢方薬原料)においても産地の違いや品質の良し悪しがあり値段に上下があります。薬王堂漢方薬局ではより品質の良いものを厳選し安価に提供するようにしております。

薬局製剤 236 処方一覧

1 安中散料
2 安中散
3 胃風湯
4 胃苓湯
5 茵蔯蒿湯
6 茵蔯五苓散料
7 茵蔯五苓散
8 温経湯
9 愠清飲
10 温胆湯
11 延年半夏湯
12 黄耆桂枝五物湯
13 黄耆建中湯
14 黄芩湯
15 応鐘散料
16 応鐘散
17 黄連阿膠湯
18 黄連解毒湯
19 黄連解毒散
20 黄連湯
21 乙字湯
22 解労散
23 化食養脾湯
24 藿香正気散
25 葛根黄連黄芩湯
26 葛根紅花湯
27 葛根湯
28 葛根湯加川芎辛夷
29 加味温胆湯
30 加味帰脾湯
31 加味解毒湯
32 加味四物湯
33 加味逍遥散
34 加味逍遥散合四物湯
35 加味平胃散
36 乾姜人参半夏丸料
37 乾姜人参半夏丸
38 甘草瀉心湯
39 甘草湯
40 甘麦大棗湯
41 桔梗湯
42 帰耆建中湯
43 帰脾湯
44 芎帰膠艾湯
45 芎帰調血飲
46 芎帰調血飲第一加減
47 響声破笛丸料
48 響声破笛丸
49 杏蘇散
50 苦参湯
51 駆風解毒湯
52 荊芥連翹湯
53 桂枝加黄耆湯
54 桂枝加葛根湯
55 桂枝加厚朴杏仁湯
56 桂枝加芍薬生姜人参湯
57 桂枝加芍薬大黄湯
58 桂枝加芍薬湯
59 桂枝加朮附湯
60 桂枝加龍骨牡蠣湯
61 桂枝加苓朮附湯
62 桂枝湯
63 桂枝人参湯
64 桂枝茯苓丸料
65 桂枝茯苓丸
66 桂枝茯苓丸料加薏苡仁
67 啓脾湯
68 荊防敗毒散
69 桂麻各半湯
70 鶏鳴散加茯苓
71 堅中湯
72 甲字湯
73 香砂平胃散
74 香砂養胃湯
75 香砂六君子湯
76 香蘇散料
77 香蘇散
78 厚朴生姜半夏人参甘草湯
79 杞菊地黄丸料
80 五虎湯
81 五膝散
82 五積散
83 牛車腎気丸
84 呉茱萸湯
85 五物解毒散
86 五淋散
87 五苓散料
88 五苓散
89 柴陥湯
90 柴胡加龍骨牡蠣湯
91 柴胡加龍骨牡蠣湯(黄芩)
92 柴胡桂枝乾姜湯
93 柴胡桂枝湯
94 柴胡清肝散
95 柴芍六君子湯
96 柴朴湯
97 柴苓湯
98 三黄散
99 三黄瀉心湯
100 酸棗仁湯
101 三物黄芩湯
102 滋陰降火湯
103 滋陰至宝湯
104 紫雲膏
105 四逆散料
106 四逆散
107 四君子湯
108 紫蘇飲
109 七物降下湯
110 柿蔕湯
111 四物湯
112 炙甘草湯
113 芍薬甘草湯
114 鵪鴣菜湯
115 蛇床子湯
116 椒梅湯
117 蒸眼一方
118 十全大補湯
119 十味排毒湯
120 潤腸湯
121 生姜瀉心湯
122 小建中湯
123 小柴胡湯
124 小柴胡湯(竹参)
125 小柴胡湯加桔梗石膏
126 小承気湯
127 小青竜湯
128 小青竜湯加石膏
129 小青竜湯合麻杏甘石湯
130 小半夏加茯苓湯
131 消風散
132 升麻葛根湯
133 逍遥散
134 四苓湯
135 辛夷清肺湯
136 参蘇飲
137 神秘湯
138 秦艽羌活湯
139 秦艽防風湯
140 参苓白朮散料
141 参苓白朮散
142 清肌安蛔湯
143 清暑益気湯
144 清上蠲痛湯
145 清上防風湯
146 清心蓮子飲
147 清肺湯
148 折衝飲
149 千金鶏鳴散
150 銭氏白朮散
151 疎経活血湯
152 蘇子降気湯
153 沢瀉湯
154 大黄甘草湯
155 大黄牡丹皮湯
156 大建中湯
157 大柴胡湯
158 大半夏湯
159 竹茹温胆湯
160 知柏地黄丸料
161 治打撲一方
162 治頭瘡一方
163 中黄膏
164 中建中湯
165 調胃承気湯
166 釣藤散
167 猪苓湯
168 猪苓湯合四物湯
169 通導散
170 桃核承気湯
171 当帰飲子
172 当帰建中湯
173 当帰散料
174 当帰散
175 当帰四逆加呉茱萸生姜湯
176 当帰四逆湯
177 当帰芍薬散料
178 当帰芍薬散
179 当帰芍薬散加黄耆釣藤
180 当帰芍薬散加人参
181 当帰湯
182 当帰貝母苦参丸
183 独活葛根湯
184 独活湯
185 二朮湯
186 二陳湯
187 女神散
188 人参湯
189 理中丸
190 人参養栄湯
191 排膿散料
192 排膿散
193 排膿湯
194 排膿散及湯
195 麦門冬湯
196 八解散
197 八味地黄丸料
198 八味地黄丸
199 半夏厚朴湯
200 半夏瀉心湯
201 半夏白朮天麻湯
202 白虎加桂枝湯
203 白虎加人参湯
204 白虎湯
205 不換金正気散
206 茯苓飲
207 茯苓飲加半夏
208 茯苓飲合半夏厚朴湯
209 茯苓沢瀉湯
210 分消湯
211 平胃散
212 防己黄耆湯
213 防己茯苓湯
214 防風通聖散
215 補気建中湯
216 補中益気湯
217 麻黄湯
218 麻杏甘石湯
219 麻杏苡甘湯
220 麻子仁丸料
221 麻子仁丸
222 味麦地黄丸
223 明朗飲
224 薏苡仁湯
225 抑肝散
226 抑肝散加芍薬黄連
227 抑肝散加陳皮半夏
228 六君子湯
229 立効散
230 竜胆瀉肝湯
231 苓姜朮甘湯
232 苓桂甘棗湯
233 苓桂朮甘湯
234 連珠飲
235 六味地黄丸料
236 六味地黄丸

(調剤中の漢方処方)

(調剤を済ませた製剤は添付文書を添え必要事項を記入した薬袋に入れる)

漢方医薬品の製造と販売に関しましては薬局製剤の製造販売の法律で規定され下記の条項が義務化されています。

１、患者の基本情報の作成

２、販売記録

３、製造記録

４、管理記録簿

詳細は日本薬剤師会編集の「薬局製造業務指針」に記述されていますので参照ください。

薬剤師として大塚医院に就職

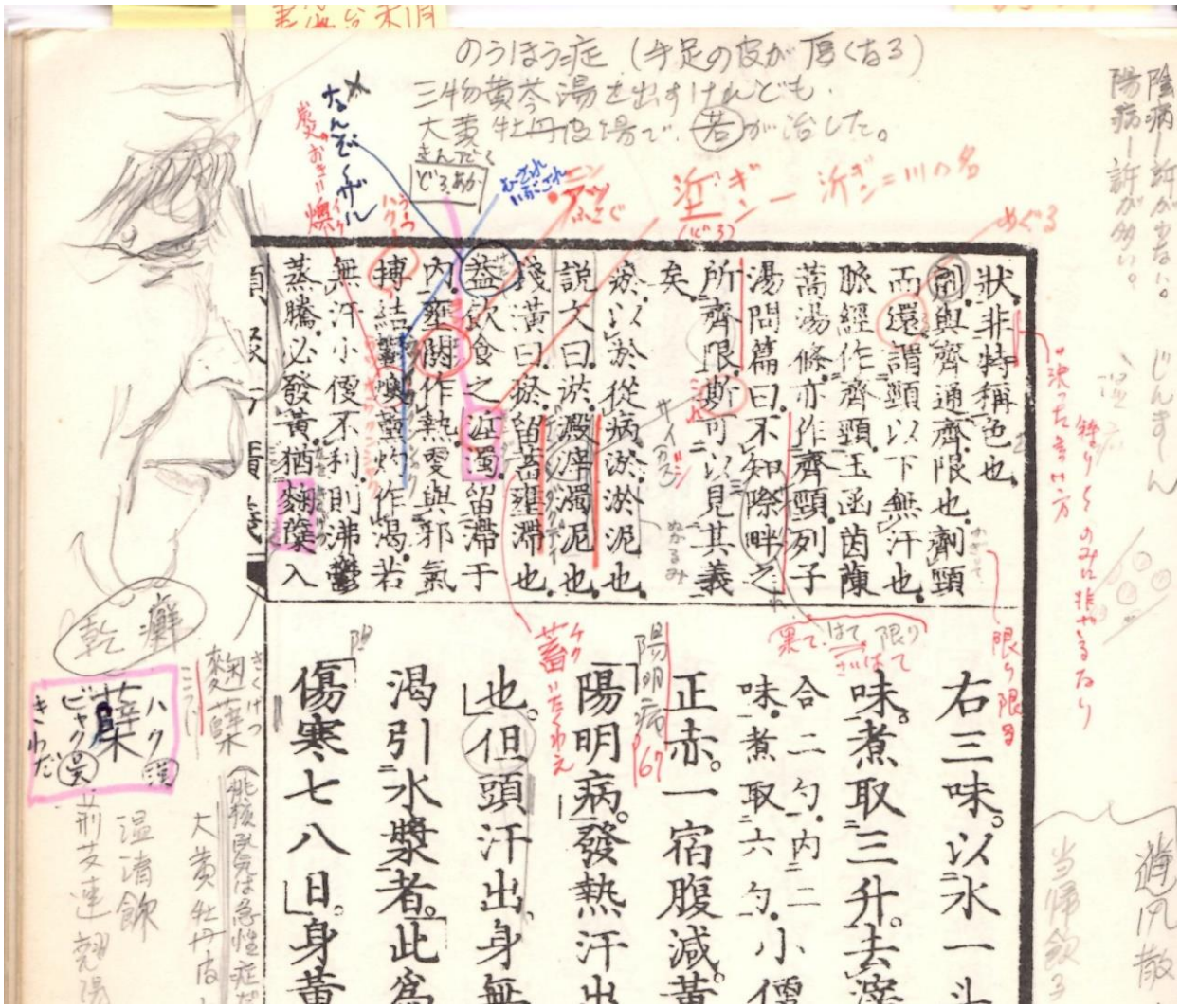
(薬局内の百味箪笥)

私は 1973 年に昭和薬科大学を卒業し同年 4 月から薬剤師として修琴堂大塚医院に勤務いたします。調剤をする薬剤師は 4 名、その他に 2～3 名の方が働いておられました。大塚敬節先生は当時 72 歳、朝 6 時には自ら医院の玄関を開け薬局や待合室の雨戸を開き 6 時半頃には診察を始められるという超多忙な毎日を過ごされていました。患者は 1 日 40 名と決められ順番をつけた札を受け付けに出しておきます。気の早い方は暗いうちから玄関前のベンチに座り開門するのを待たれる人さえいました。先生は一人の患者さんに 20 分くらいの時間をかけて診察されました。調剤を始めるのは我々が出勤する 8 時過ぎからでしたが大塚先生はすでに朝食を済まされていましたので 12 時過ぎまで診察は続きます。奥様が用意された昼食も 15 分くらいで済まされ休む間もなく診察に入られます。私たちは 1 時間の昼休憩をもらい交代で昼食を済ませていました。先生は午後 5 時過ぎにすべての患者さんの診療を終えてやっと一息されます。私たちは百味箪笥の生薬をつぎ足し掃除をして一日を終了しました。大塚先生の推薦で私は 6 時から始まる夜間の呉竹鍼灸柔整専門学校に通いました。大塚恭男先生も週に一度診察されました。1 年が過ぎたころ、私は敬節先生に朝の 6 時過ぎから調剤の始まるまでの 1 時間少々の間、先生の横で診察を見せていただけないでしょうかとお願いしてみました。許しをいただき早朝に出勤して診察を見せていただくようになります。これは勉強になりました。いろいろなことを教わりました。大塚先生は腹診をしながら「これが少腹急結だよ！」「これは八味丸の腹症だ！」と教えてくれます。ほかにも小建中湯、人参湯、小柴胡湯の腹症やもろもろの処方の決め手などを説明されることもありました。先生と患者さんのやり取りは自分なりに要約し約千枚のノート用紙に記録しましたので時々読み返しています。調剤が始まっても先生と患者さんの対話は後ろから聞こえてきました。気になることは覚えておき後でメモをとりました。調剤室は広くはありませんでしたが 5～6 人が常に動き回っていました。

(薬剤師と大塚敬節先生・大塚恭男先生)

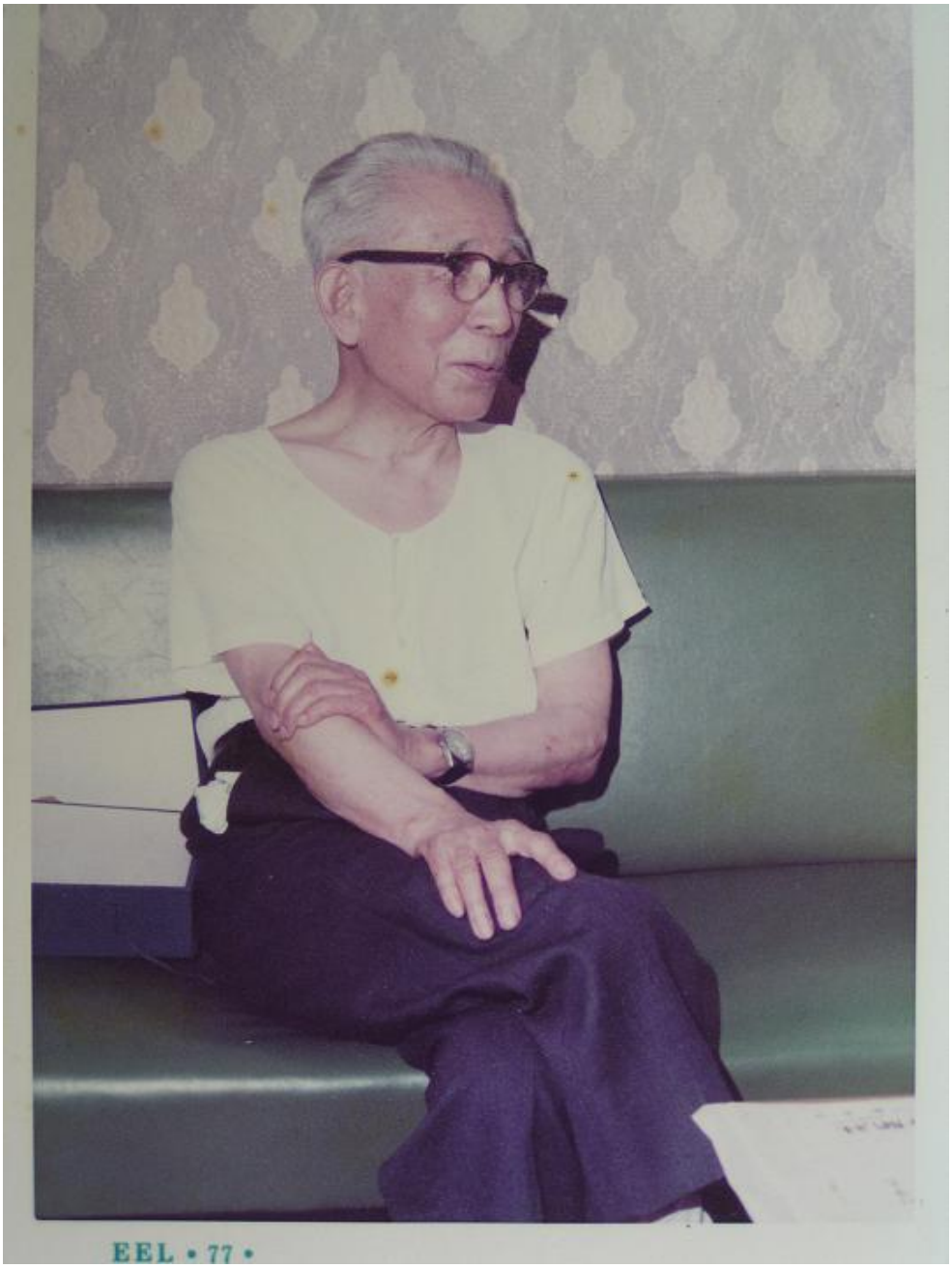
休日の勉強会

大塚医院は火曜日が休日でした。ある日、敬節先生はこう言われます。「君たちは将来、漢方を扱う薬局をするだろうからその時のために勉強するか！」と。それから毎月一回の勉強会が始まります。生徒は勤務する薬剤師 4 名だけ。朝 10 時に待合室に集合し勉強会は始まりました。昼休憩をはさみ午後は 4 時過ぎまで漢方の指導をしてくださいました。最初は「衆方規矩」の解説から始まりました。薬局で漢方相談をするには症候別に処方を配列した衆方規矩が便利だと考えられたようです。次にテキストとしたのが「薬徴」でした。吉益東洞の薬徴は岩波書店の日本思想体系・近世科学思想下巻に大塚敬節先生が自ら解読し頭注解説を加えた本が出版されていました。これも漢方薬を扱ううえで配剤される生薬を知っておくことが非常に重要であるということが理由でした。その次に始まったのが尾台榕堂の「類聚方広義」でした。類聚方広義の解説は長く続きました。私は 3 年間勤務しましたが退職後も類聚方広義の講義は続けられました。退職後、新幹線で広島を発ち講義に間に合うよう 2 年間大塚医院に通ったものです。類聚方広義の解説は 1974 年 2 月 26 日(火曜日)から 1978 年 3 月 7 日(火曜日)まで続きました。



(類聚方広義・茵蔯蒿湯の書き込み・大塚敬節先生の似顔絵を速画している)

診察の後、大塚先生は日本漢方医学研究所の講堂でも月に一度勉強会を開いておられました。テキストは金匱要略を用い参加されていたのは相見三郎先生、藤平健先生、伊藤清夫先生、山田光胤先生、寺師睦宗先生、木村雄四郎先生といった超一流の方々ばかり、私は大塚先生のお誘いにより末席をいただきました。中将湯ビル診療所の主任薬剤師である高橋国海先生が記録を担当されました。この記録は高橋国海先生がテープを起こし創元社から「金匱要略講話」として出版されております。



(類聚方広義の解説をする大塚敬節先生)

休日に大塚先生が紫雲膏を作ろうと言われたことがあります。当時、ごま油は適量手に入りませんでしたので食用の一斗缶を買い求めました。豚脂は肉屋に行ってラードを買いフライパンで熱して液状になったものを使用しました。七輪で火をおこし使用する容器は飯炊き用の釜を用いました。油の温度を測る温度計はありませんでしたので華岡青洲一派が紫雲膏を製薬した方法に従いました。そのような情報や資料は大塚先生が提供してくれました。油煙の出方、紫根や蜜蝋の質、当帰の量などにもこだわり制作したことを思い出します。大塚敬節先生は医師であり学者でもありましたが本当に漢方が好きな情熱家であったと思います。

大塚敬節先生の日常

1 日 40 名の患者さんを診た後は早めの夕食を済まされました。晩酌もなさらず食後は読書と執筆に忙しい毎日だったと思われます。診療中にこんなことがありました。大塚先生が栽培するケールの畑にモンシロチョウが飛んできました。それに気が付いた先生は診察室の窓から突然飛び降り「このやろ～！」とチョウを追っかけだします。患者さんも我々もその様子に唖然として見入ります。ケールはキャベツに似た食用野菜で大塚先生は毎日の食事に添えておられました。よほどケールの葉がチョウの産んだ幼虫に食べられるのが嫌だったのでしょう。

(ケールに卵を産みにきたチョウを追いかける大塚敬節先生)

寺師睦宗先生が尋ねて来られたことがありました。寺師先生は鹿児島出身の方で早くから大塚先生について漢方を勉強された医師です。第一弟子だと大塚先生は言われていました。寺師先生は診療所の玄関先で直立不動をされたまま大きな声でこう言われます。「大塚敬節先生！寺師です！」と。大塚先生が玄関に出るまでは決して中に入ろうとされませんでした。「おう寺師君久しぶりだね、そんなところに立っておらず中に入りたまえ！」と言われてやっと笑顔になられます。親愛なるお弟子さんの訪問であろうと診察時間を大幅に削るようなことはされませんでした。

(直立不動姿勢で大塚敬節先生を待つ寺師睦宗先生)

1973 年、広島県医師会常任理事をされていた江川義雄先生が大塚医院を訪れます。要件は安芸の国(広島県)出身、吉益東洞先生の顕彰碑碑文を大塚敬節先生に書いてもらいたいとのお願いに上京されました。私は調剤中でしたが広島県出身であったことから江川先生から親しく話しかけられました。依頼を受けたその夜から大塚先生は奥の座敷で習字を始められました。これでもか！これでもか！と書いては丸め悪戦苦闘されていた姿を思い出します。4～5 日はこんな日が続いたでしょうか。碑石の文字は出来上がり郵送されたようです。広島漢方研究会有志の協力もあり当時の会長であった小川新先生を中心に立派な碑石が出来上がり広島大学医学部構内に設置されています。毎年、広島漢方研究会が主催して吉益東洞顕彰会を開催しています。

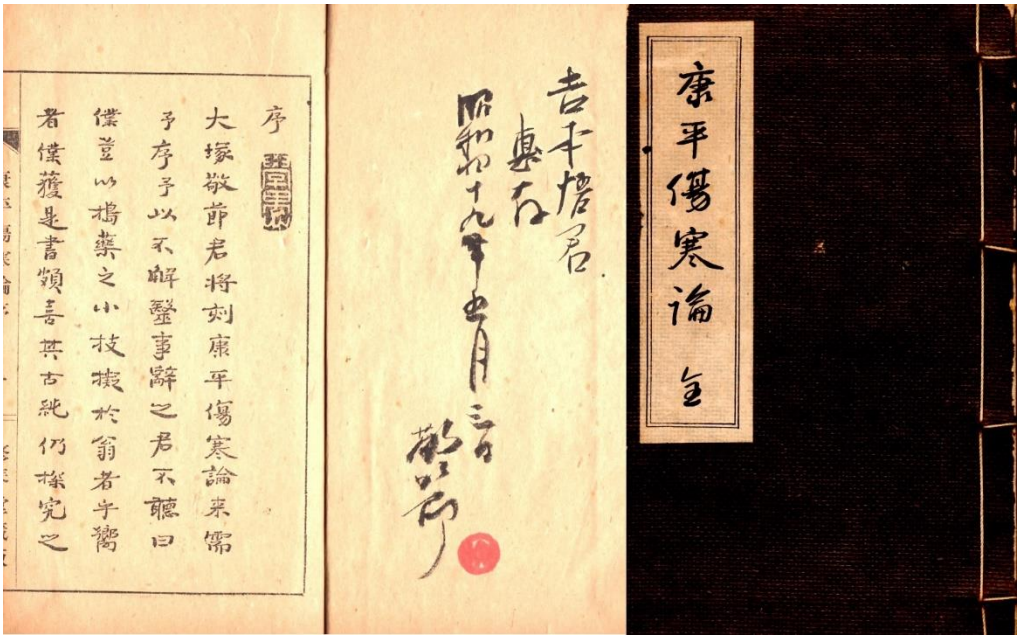
(1973 年ころ、吉益東洞顕彰碑と書く大塚敬節先生)

その他、いろいろな方の訪問がありました。
当時の日本医師会会長である武見太郎先生の来訪時は少し長めに診察時間をさいて話し込まれました。おそらく漢方薬が医薬品に認可される時期に当たり長めのお話になったのだと想像しています。

著書と関連書籍について

大塚敬節先生は多くの著書を残されています。主なものを紹介しましょう。
昭和 7 年
「類証鑑別皇漢医学要訣」自費出版
昭和 8 年

実験漢方医学叢書「臨床応用編・内科」共著、南山堂
昭和 9 年
機関誌「漢方と漢薬」春陽堂より創刊
昭和 11 年
「康平傷寒論」発掘、翌年覆刻本を刊行
昭和 16 年
「東洋医史学」山雅房
「漢方診療の実際」矢数道明・木村長久・清水藤太郎共著、南山堂
昭和 29 年
「漢方診療の実際」改訂版、清水・矢数共著、南山堂
「漢方の臨床」創刊　東亜医学協会
昭和 31 年
「漢方医学」創元社
「診断と処方漢方療法」講談社
昭和 32 年
「民間薬療法と薬草の知識」長塩容伸共著、東都書房
昭和 34 年
「漢方診療三十年」創元社
「活」漢方の友の会より創刊
昭和 35 年
「東洋医学とともに」創元社
昭和 38 年
「症候による漢方治療の実際」南山堂
昭和 39 年
「薬草の知識と効用」長塩容伸共著、東都書房
昭和 41 年
「臨床応用傷寒論解説」創元社
「漢方と民間薬百科」主婦の友社
昭和 44 年
「漢方診療医典」南山堂
昭和 45 年
日本思想体系「近世科学思想・下」に後藤艮山「師説筆記」吉益東洞「薬徴」「医事或問」の解説、岩波書店
「漢方の特質」創元社
昭和 49 年
「療治経験筆記」「方彙口訣」「梧竹楼方函口訣」「和語本草綱目」「方輿輗」「為方絜矩」などを覆刻出版
昭和 51 年
歌集「杏林」春陽堂より自費出版
「漢方ひとすじ」日本経済新聞社
昭和 52 年
「漢方療法」主婦の友社
昭和 53 年
日本医師会より最高功労賞を受賞



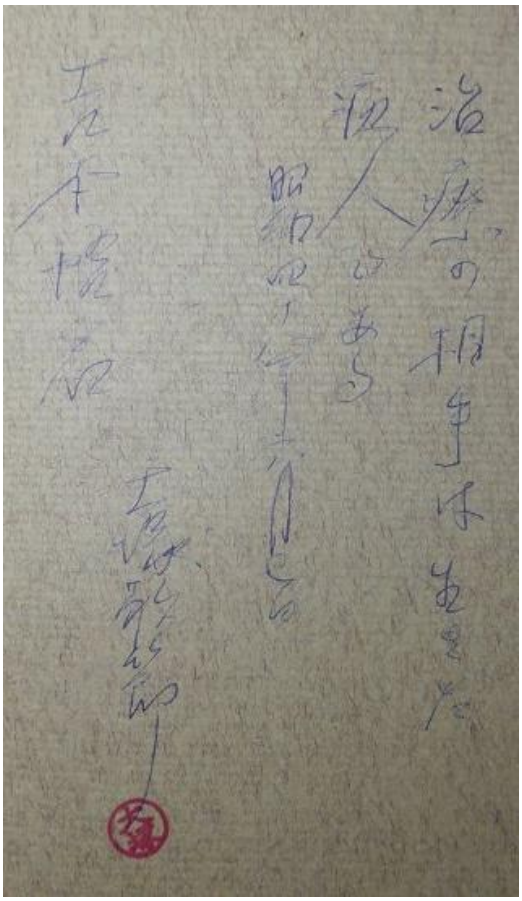
大塚敬節先生が昭和 11 年に発掘し翌年に覆刻した「康平傷寒論」

その他、多くの研究発表論文を機関誌、専門誌、新聞紙上に残されています。
漢方との出会とその後の活動については日本経済新聞文化面に連載した「私の履歴書」に詳しく書かれております。その中で印象的だったのは西洋医学にも心を留めながらも反対学(漢方医学)を積極的に学んだということ、人間も自然の一員であることを前提とした東洋医学は西洋医学とは反する面があるということを強く意識しておられたようです。中国や朝鮮から日本に持ち込まれた東洋医学が独自の発展をなして漢方となったことも重要視されていました。
毎日新聞の連載コラム「この人と」に漢方医学と題して大塚敬節先生が松岡英夫氏と対談する形式で連載された記事があります。北里研究所付属・東洋医学総合研究所所長になられていた時で私も記事を切り抜いて保存しています。漢方ブームといわれた昭和 50 年代、過去において漢方医という立場は法律で禁止されたことなど苦難の歴史を論じられています。
若いころの大塚先生は文学に興味があり作家になることを夢見ておられたそうです。医者の家系であったことから熊本医専(現熊本大学医学部)に入学され医学を勉強されますが作家へのあこがれは持ち続けられたと聞きます。卒業後、郷里の高知に帰り医者として仕事をされますが往診先の子供を診るのに金匱要略に書かれた甘麦大棗湯の症状にそっくりなことに気づき煎じて服用させたところ非常によく効いたことに驚かれたそうです。その当時では珍しいオートバイを購入し往診先を訪れていたと話しておられました。そんなことがあってから皇漢医学を出版された湯本求真先生にあこがれ若干 30 歳の大塚先生は東京の湯本先生の医院を尋ねられ門人となられます。1 年の修業の後、高知の大塚医院を閉鎖して家族を東京に呼び寄せ漢方医道の生活が始まりました。昭和 5 年の頃と聞いております。湯本先生から言われたことは「宣伝はするな！交通の便利がいい場所に開業しなさい！電話はつけなさい！」だったとか。湯本先生が言われた通り開業して 3 年は患者が来ない毎日だったと笑いながら話されていました。
昭和 31 年に創元社から発刊した「漢方医学」の小冊子は何度か改訂版を経て広まっていました。昭和 48 年の第 3 版改訂版は紙質も良好で片手でページをめくるのに丁度いい大きさでした。大塚先生は自著であるにもかかわらず診察中座右に置き、この本を開いては読み返しておられました。

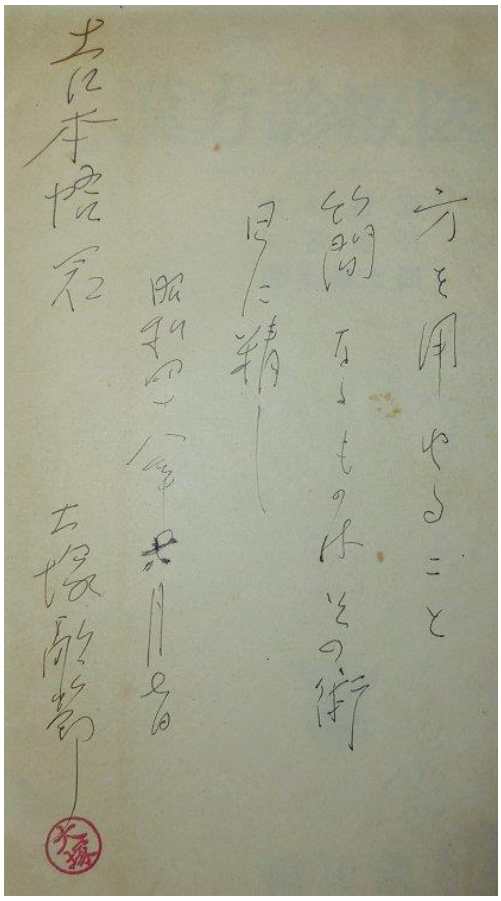
大塚先生の好きな詞があります。
「症候による漢方治療の実際」大塚敬節著にこう書いてもらいます。

『治療の相手は生きた病人である。昭和四十八年八月七日　大塚敬節㊞　吉本悟君』

「漢方診療医典」大塚・矢数・清水共著にはこう書いてもらいます。
『方を用いること簡なるものは、その術日に精し。昭和四十八年六月七日　大塚敬節㊞　吉本悟君』



(症候による漢方治療の実際・表紙裏)



(漢方診療医典・表紙裏)

「漢方医学」の小冊子には『大匠は教うるに規矩をもってし人をして功ならしめず』
「漢方と民間薬百科」にも漢方の重要性を示唆する詞を書いてもらっています。

このような多くの詞は大塚先生の経験から生み出されてきたものですが若い時代に読破された先哲からの教えを教訓とされたものが多いようです。大塚先生の未発表文書も含め若い時代に苦悩されながら追い求められたメモ書きの一部を書き写したものがあります。大塚先生の許可を得てお借りしました。

若き日の大塚敬節記述文章　(メモ書き、未発表文章も含む)

東洋医学とともに　　大塚敬節

薬方はいくつかの薬の組み合わせによって構成され、薬方のために自己を殺し、薬方として生きると同時に自己を生かしている。麻黄湯中の桂枝・麻黄・杏仁・甘草は土鍋の中で一緒に煮られる時、これらの薬は自己を殺して麻黄湯を構成する。このようにして個々の薬物は自己を殺すことによって価値的に生かされるのである。
薬と薬方　敬節述

「薬方は自由にとりすえるべきことなり。是は脱肛の薬、是は下血の薬としては面白からず。例えばすり鉢に灰を入れるならば火鉢にもなり、又、土を入れるならば植木鉢にもなり、水を入れるならば水鉢にもなり、真倒さにすれば踏み段にもなる。薬方もかくのごとく考え工夫すべし、」和田東郭

桂枝去芍薬湯の場合に芍薬を去ることは芍薬を殺すことではなくて、かえって芍薬を生かすことであるということがこの頃わかってきた。芍薬を去ることで桂枝去芍薬湯が生きるのであるから芍薬もまた生きることになるのである。私はこの際、芍薬なる「個」を犠牲にすることによって桂枝去芍薬湯なる「全」が生かされているという風に考えたくはない。芍薬は犠牲になって消え去るのではなく一歩後退するのである。重大であるがゆえに後退するのである。深く隠れることは強く生きることである。もし芍薬を殺すという意味ならば桂枝去芍薬湯とせず芍薬を抹消した別の方名をつければいい。加芍薬湯のような露出した生活は easy going 的な生活である。去芍薬の生活こそ後退することによって生かし生かされる生活である。　敬節　　加生活と去生活(加芍薬と去芍薬か？吉本)

身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ

ところで、ある時は西洋薬を用い、ある時は漢薬を使ったりするような不徹底な態度では、とうてい漢方医術を呑み込むことは難しいと考え、田舎の家をたたんで上京し漢方だけで治療することにした。鍼灸の研究もまた中止しようと決心した。漢薬の治療と鍼灸の治療を併用しては、どちらもものになるまい。古い地盤(医者としての家系)というものがあれば、苦労しなくても、病人が治らなくても、患者が集まってくるので勉強が疎かになりがちである。これら一切を捨て去らなければ漢方はものになるまいと考えた私は冒険だとの警告を克服して上京した。私は考える。鍼灸術を習得ためには五年ないし十年間は漢方薬による治療を捨てる覚悟が必要である。天才は別であるが薬物療法と鍼灸治療とを併用しながらでは鍼灸の術は習得できない。漢方を勉強し始めた時のように捨て身になることが出来ないようではむしろ手を染めないほうがいい。今の私の心境では薬物療法を全廃する決心がつかないのである。そこで私は鍼灸術習得の念願を後退せしめたのである。天下には技神に通じる鍼灸家がいる。下手な私がいい加減な治療をするよりも、これらの方々に治療を任せた方が鍼灸術を生かせる道と考えた。未練だがこれが「去芍薬」の生活であると私は考えている。　　未練

「死せる形を認識する手段は学的な法則である。生きている形を理解する手段は類推である」　　西洋の没落　シュペングラー

西洋医学にあっては胴から切り離された腕も腕であり、摘出された眼球もやはり眼であるが、東洋医学にあっては胴から切り離された腕は腕としての機能がないから腕ではない。摘出された眼球ももはや眼と呼ぶべきでない。治療に際しても診断においても人間は常に宇宙の一部分であって唇も爪も髪も身体の一部分であるとともに宇宙の一員であることを忘れてはならない。これらに東洋医学の真面目がある。眼の病気の治療に際しても病める眼を全体と調和せしめることを治療方針とする。自然を克服せんとする心は自然を離れる心である。自然に順応せんとする心は自然に溶け込む心である。西とすべきか東とすべきか嗚呼我は自然とともに悠久たる生を自然の中に欲するものである。　　自然の中に　　敬節

頭痛を訴える患者があるとき、その頭痛という症候だけを目標に治療をすることは「対症療法」であって「随証療法」ではないのである。随証療法では病人に現れている症候を整理し選択して「証」を診断し、この証に随って治療を施すことになるのである。それ故に証の診断は理念的であるし形成的である。例えば雨はますます降りしきる。雨の足音だけを聞いていると秋雨のようであるが窓を開けると銀杏の青葉を濡らすように初夏の雨が降

っている。我々は春雨と秋雨とを雨音だけで鑑別することは難しい。四季の雨音をラジオで放送していると何時の季節の雨であるかを判断することが出来るのは何人いるだろう。そんなことを考えながら私は雨をぼんやりと眺めている。　　対症療法と随証療法　　敬節

患者と医者
むかし奥村良筑という名医は自分に少しでも不快なことがある時は一切診察を断った。こんな時に診察すると誤診するからとの理由かららしい。診察の場は真剣勝負である。他に心を奪われながら診察することなぞもっての外の不心得であったと私は深く反省せしめられた。患者がつづく時は気が張り切っていて診断を誤ることが少ない。暇で書物を読んだり原稿を書いている時に、ぼつぼつ患者が来ると気分転換がうまくいかず精神の集中に骨が折れる。患者と医師が一つにとけあっていくには努力がいる。努力を惜しんではならないと思う。

亀井南溟
〇医は意なり。医は学より生ず。
〇医は意なり。意というものを会得せよ。手にも取れず画にも描かれず。
〇医は意なり。方に古今なし。治を期するを要す。
〇論説をやめて病者を師とみなし夜を日についで工夫鍛錬。
〇三度、肱を折って良医となる。
〇方を読むこと三年、天下治せざるの病なく、方を用いること三年、用うべきの方なし。
〇百方を得るは易く一効は求め難し。
〇乱世のいくさ稽古と、我門の医術稽古が同じ道理じゃ。
〇難しき敵にも遂に撃勝は筆に云われぬ妙な塩合。
〇万能も一心という古言をよく心得て戒めとせよ。
〇芸術の稽古の道に二つなし。上手と下手は其の修練だけ。
〇古人の病を診するや彼を観るに彼を以て能く病の情に通ず。

和田東郭　(医則)などから
◎大匠は教ゆるに規矩をもってし人をして巧ならしめず。
〇古人の病を診するや色を望むに目をもってせず、声を聞くに耳をもってせず、夫れ唯だ耳目をもってぜず。故に能く病応を体表に察するなり。
〇老医に成るに随って段々偏狭になる人あり。此の如きはしょせん論なきことや。
〇兎に角人は実意深切というもの第一のことなり。是れをかたく尽くして見るときは則ち忠なり。此の忠を立ちく時は岩をも通す処の力ありというべし。
◎方を用ゆること簡なる者は、其の術日に精し。方を用ゆること繁なる者は其の術日に粗し、世医ややもすれば輒ち簡を以て粗となし、繁を以て精となすなり。哀しいかな。
〇蚕が一心に桑を食って繭を作るがごとく、
大塚敬節　　東郭に想うの述

永富独嘯庵
〇凡そ百技、巧より始まりて拙に終わり、思に出でて不思に入る。故に巧思極まるときは則ち神妙なり。神妙なるときは則ち自然なり。自然なるものは巧思を以て得べからず。歳月を以て至るべからず。巧思を離れて得べからず。歳月を外にして至るべからず。

雨森宗真　松かげ医談より
〇人は活物なり。療治は活技なり。もとより邪気にもだまされるかたちねければ、何という病、何という経穴など侍にもかりそめにもうけし名なり。されば療治の手にいりたる人のうえにては、大方いらぬ事柄なり。ただ人にも伝え、後の世にも書き残さむには、かかることなくてもかなわず。その実はみな療治手に入るまでのことなりと思うべし。
豊浦元貞
〇上手をつとめて人を勢利の間に殺さんよりは下手をつとめて人を庸愚の間に救え。
〇術が手に入るときは生くべき。病人を他医に譲って殺すことはない。

和田東郭＝東洞門下生、勘の医学を力説
亀井南溟＝後藤艮山「一気留滞論」の支援者。東洞門下より脱退。古今伊呂波歌
村井琴山＝肥後の東洞門下生
永富独嘯庵＝山脇東洋の門人、漫遊雑記、吐方考など、東洞曰く「隠として敵国の如きは永富氏の子か、我死せば此の人を以て内海医流の冠冕とすべし」と、

●術の中に消える医者
小川芋銭　後藤艮山　松原一閑斎　奥村良筑　峯少翁　辻元崧庵

香川玄悦＝妊娠時、正規の胎児体位を発見する、
戸田旭山＝門人　和田東郭
原南陽
和田東郭＝戸田旭山に若き頃学んだが、それ以前に竹中節斎について修業(中川壺山著　医方新古弁)　後に東洞門下生となるが旭山を生涯の師とした。

和田東郭　門下生＝竹中南峯　小松大陵　土生玄硯　垣内成章　中村哲(東郭の養子)　菅茶山

豊浦元貞　下手の医学　「豊浦遺珠」を刑、信州飯田　「中川修亭　医方医方新古弁」三河岡崎に居す

反東洞派＝畑黄山、　堀江道元、　山田図南、　石井光致、　亀井南溟、　塩田陳庵

東洞弁護派＝田中栄信(東洞門下生)、　村井琴山「死生弁」刊行
(昭和四九年三月、吉本筆写につき誤読や誤記あり)

3 年間の大塚医院勤務を終了し広島に帰ることになった私に大塚敬節先生はご自分の蔵書の中から数冊を選んで筆写(コピー)するよう手渡されました。26 歳の私がこれから先、漢方の道を歩んでゆくことへの餞(はなむけ)でもあったのでしょう。
試験方口訣　　上中下三巻　筆写本

纂方規範　　上中下三巻　筆写本　　巻末に「逸翁啓明」とある

梧竹楼方函口訣　　鳩窓先生口訣・全巻　　筆写本

今はこのような古文書・筆記本は容易に手に入らないでしょう。
昭和初期、漢方に関わる古文献は神田神保町や本郷の古書店において大量に出回っていたと思われます。特に趣味のなかった大塚先生は暇を見ては古書店に通ったと言われました。その中から臨床に役立つものを見つけ出されてこられたのでしょう。私にとってなににも代えがたい餞別でした。

結婚式前日に書いていただいた色紙

在職中、よく叱られもしましたが可愛がってもいただきました。一番の思い出は大塚先生ご夫妻に仲人をしていただいたことです。遠路、広島まで来ていただき結婚の仲立ちをしていただいたことです。長男が生まれた時にも奥様が祝いを持って牛込の住まいに来てくださいました。広島に来ていただいた時、宮島行の船の中で撮影した大塚先生ご夫婦の写真が私の一番好きな一枚となっています。

昭和 50 年 1 月 6 日、広島の宮島に参拝された時の大塚先生ご夫妻！

文責：吉本悟　　薬剤師・はり師・きゅう師・あん摩マッサージ指圧師